

【暗証聖句】

「主はわたしに報いてくださった。わたしはどのように答えようか。救いの杯を上げて主の御名を呼び、満願の献げ物を主にささげよう。主の民すべての見守る前で。」詩編 116 編 14 節

【日・与えるための動機】

私たちが神様を愛するのは、神様がまず私たちを愛してくださったからです。私たちが献金をささげるのも、この神様からの愛に答えるためです。献金を、義務や強制のように感じている人もいるかもしれませんが、そうではなく、神様から多くの罪が赦されて、神の子とされていることへの感謝と喜びを表す手段なのです。神様への愛を献金という形で表すことができるのです。

イエス様は金銭と富について多くのことを語っておられます。それだけ大切なことであるからです。金銭に執着すると心が徐々に神様から離れてしまうものです。そのためしばしばサタンは、私たちが神様から引き離す手段として、この金銭や富を用いてくるのです。このようなサタンの誘惑から守られるためにも、献金は有効な手段となることでしょう。

また、イエス様は、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである」(マタイ6:31, 32)と言っておられます。つまり、金銭の不安や誘惑は、不信仰の結果生じるものだということです。神様が私たちの必要をすべてご存じであることを信じる事ができれば、このような不安や誘惑は消えるのです。

それと共に、申命記 28 章 2 節で、「あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう」との約束の中に生きることが大切です。主の御声に聞き従うならば、常に主の祝福が伴いますので、何を食おうかと思悩むこともなくなるのです。

【月・どれくらいささげるべきか】

バプテスマクラスでよく尋ねられるのは、どれくらい献金をささげたら良いのですかという質問です。初めての方がそのように問うのは無理もないことです。他の人はどのくらいささげているのだろうかということも気になることでしょう。「無理のないように、できる範囲で大丈夫ですよ」と答えても、なかなか納得してくれません。では、聖書は何と教えているのでしょうか。

申命記 16 章 17 節「あなたの神、主より受けた祝福に応じて、それぞれ、献げ物を携えなさい。」

どれくらいささげるかについては、「主より受けた祝福に応じて」とあります。これはとても漠然とした表現ですが、定額であったり、什一のようにパーセンテージが決まっているというわけではないことはわかります。また「それぞれ」と書かれてありますので、他者との比較ではなく、それぞれが神様との関係の中で決めるべきものであることもわかります。

それよりも大切なことは、主より数えきれないほどの祝福を受けているという事実です。一体どうやって、それに答えることができるのでしょうか。詩編 116 編 12 節でも、「主はわたしに報いてくださった。わたしはどのように答えようか」と言っています。神様の祝福や恵みはあまりにも大きくて、私たちは答えようがないのです。

日本では、いただきものにお返しするという習慣があります。とても良い習慣ですが、そのいただきものがあまりにも高価すぎると恐縮してしまい、どうお返ししたら良いかわからなくなってしまうことがあるものです。さらに、お返しすること自体が失礼に感じてしまうような贈り物もあるかもしれません。そのような場合は、感謝の気持ちを返礼品ではなく、別の形で表すのではないのでしょうか。

同様に、神様から受けた祝福や恵みは、とても私たちがお返しできるようなものではないのです。イエス様の命をいただいているのですから。私たちができることは、主に従っていくということだけです。そして、僅かばかりではありますが、献金という形で感謝を表すのです。先の詩編 116 編 12 節「主はわたしに報いてくださった。わたしはどのように答えようか」は、こう続きます。「救いの杯を上げて主の御名を呼び、満願の献げ物を主にささげよう。主の民すべての見守る前で」と。私たちも、主がくださったことの大きさに比べたら、それに見合うお返しは何もできないけれども、せめて感謝の気持ちを献金に込めて、ささげていきたいものです。

【火・ささげ物と礼拝】

聖書には、4 つの礼拝行為が記載されています。それは、「学び・説教」「祈り」「音楽」「什一とささげ物」です。献金も礼拝行為であり、単に献金箱に入れたら良いのではなく、私たちは献金を通して主を礼拝するのです。イスラエルの民は年に 3 度、エル

サレムで主の前に出なければならず、その際には「何も持たずに主の御前に出てはならない」(申命記 16:16)とされていました。つまり、ささげものを携えて主の御前に近づき、主を礼拝したわけです。ささげ物に関する以下の3つの聖句を見てみましょう。

歴代誌上 16 章 29 節「御名の栄光を主に帰せよ。供え物を携えて御前に近づき、聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ。」
詩編 96 編 8、9 節「御名の栄光を主に帰せよ。供え物を携えて神の庭に入り、聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ。全地よ、御前におののけ。」

詩編 116 編 17～19 節「あなたに感謝のいけにえをささげよう。主の御名を呼び、主に満願の献げ物をささげよう。主の民すべての見守る前で。主の家の庭で、エルサレムのただ中で。ハレルヤ。」

主の御前に近づくことが許されている、主の家の庭に入ることが許されているとは何と光栄なことでしょう。そのとき、人はささげものを携えていったことが記されています。それによって主に栄光を帰し、また感謝を表したのです。私たちも同様に、ささげものをもって主の前に近づくことができます。

【水・神は私たちのささげ物に注目しておられる】

神様は私たちのささげ物を見ておられます。しかし、それは額の大きさをみておられるのではなりません。どのような気持ちでささげているのか、その動機を見ておられるのです。ある時、貧しいやもめが献金しているのを見て、イエス様は弟子たちに次のように言われたことがありました。

マルコ 12 章 43 節 「はっきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。」

なぜ、イエス様はこのように言われたのでしょうか。それは他の人は有り余る中から入れたが、このやもめは、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからでした。では、なぜ貧しいにもかかわらず、持っているものをすべてささげようと思ったのでしょうか。ガイド P32 に次のような祝福に満ちた生活からの言葉が引用されています。

「彼女は宮の奉仕が神に定められたものであることを信じていたので、それを支えるために全力を尽くそうと願った。彼女は自分のできることをした…彼女はささげ物と一緒に心をささげた。そのささげものの価値は貨幣の価値によってではなく、彼女の行為の動機となった神への愛とそのみざわに対する関心によってはかられた」

当時の教会はまもなくイエス様を拒むことになるのですが、それでも主は彼女の心を見られて良しとされたのでした。現代の教会も様々な問題を抱えているかもしれません。そのために献金をささげるのをためらってしまうこともあるかもしれません。しかし、神様は私たちの心を見られることを覚えたいと思います。そして、教会が正しく主のためにささげられた尊い献金を用いていけるように祈っていきたいと思います。

【木・特別なプロジェクト: 大きなびんのささげ物】

マリヤがイエス様の足に高価な香油を注ぐという出来事が聖書の中に出てきます。あの香油もささげ物です。しかも 1 年分に相当するような高価なささげ物でした。このマリヤのささげ物は、特別献金として考えることができます。私たちは、毎週あるいは毎月の決められたささげ物とは別に、特別なときに、特別なささげ物をする場合があります。たとえば、仕事が与えられたとか、子供が生まれたとか、病気から快復したなど、神様に特別な感謝を表したいときに、特別な献金をささげるわけです。このようなささげ物も、やはり神様は私たちの心を見られます。私たちの感謝な思い、喜びを見てくださり、主も一緒に喜んでくださることでしょう。